’22

帰国生選抜

小論文

（医学部医学科）

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は１冊（12 頁），解答用紙は２枚，下書用紙は２枚です。落丁，乱丁，印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
   文字はわかりやすく，横書きで，はっきりと記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

以下のテクストは、レベッカ・ブラウン「言葉の贈り物（The gift of speech）」です。日本語訳をもとにしていますが、ところどころ原文のままにしてあります。よく読んで問１～16に日本語で答えなさい。なお、*が付いた英単語については末尾の訳注を参照できます。

疫病がはじまったときには、発病してから死ぬまでの間隔がいまより短かった。それに、疫病がはじまったときには、こんなに長くつづくとは誰も思わなかった。みんな、そのうち何か治療法が発見されるだろうと思ったのだ。だから、ＵＣＳ（アーバン・コミュニティ・サービス）が発足した時点では、メンバーは六か月仕事をつづけるよう求められた。相手が生きる期間はだいたいそれくらいであり、それだけやれば、最期まで世話ができたのだ。でも疫病は終わらなかった。ウィルスを弱らせる薬や、いくつかの症状を遅らせる薬は発見されて、前よりも長く生きられるようにはなった。誰かと一年、二年、ときにはそれ以上接することもあるようになり、その人と一緒に過ごす暮らしにすっかり慣れてしまう場合も出てきた。でも治療法はいっこうに見つからなかったから、相変わらずみんな死んだ。死ぬのが長引くようになっただけだった。

たいていの場合、発病していても生活は維持できる。やがて何か深刻な症状が出て、病院に入れられて、これで死ぬのかと思うけれど、何とか持ちこたえる。やがてまた症状が出て、今度こそ死ぬかと思うがやはり死なないので、これなら何とか、治療法が見つかるまでもつんじゃないかと思えてくる。これなら死なないんじゃないか、と思えてくるのだ。

彼らが死ぬと、こっちは彼らがいなくなって寂しくなる。でもある意味では、もうその前から寂しくなっているとも言える。じきに彼らが死ぬことを知っているから。そういう気持ちに、彼らと過ごす際のしかるべき態度を妨げられぬよう、気をつけはする。こういうふうに彼らと接したい、という思いを乱されぬよう気をつけはする。でもときには、そうしたくてもできない。そういう場合、彼らがいなくなったときは、とても辛い。

疫病が何年もつづいて、やっとホスピスができた。まず一軒できて、それからまた一軒。六か月以上生きられない人だけが、入ることができた。死ぬのにどこか「快適

（カンファタブル）」な場を提供する、というのが理念だった。ホスピスが開くと、どこもものすごく長い順番待ちリストができた。入れたら、よほど運がいいということだった。でもみんなどんどん死んでいったから、回転も速かった。それでも、発病する人はもっと増えたから、リストはますます長くなっていった。

エドが出ていってから二、三週間(A)して、リックがホスピスに部屋をとれた。

いつものように、私はリックのアパートに行った。毎週火曜と木曜の午前に通っていたのだ。

I knocked on his door and yelled, “Hey, buddy*!” and let myself in. Rick hadn’t answered his door himself in a while. I went in and said, “So how’s my main man today?”

He was on the couch under his down comforter*.

“I got a room,” he said quietly.

I knew he meant at the hospice. “Oh,” I said. He’d been waiting for a while, but when you actually got it, it was like getting your sentence.

“I’m glad there’s a room for you,” I said.

“I’m glad there’s a room too.” He pulled his comforter up closer under his chin.

I started taking off my jacket.

“You don’t have to stay here today,” Rick said. “I don’t need you to do any work.”

He’d never called it “work” before. He’d always called it “help.”(B) And when I’d heard him talk on the phone he didn’t call me his “home care aide*” or “home care worker,” he called me my name like I was just someone he knew.

“There’s no point in you staying,” he said. “My friends from the pagan circle* have been planning to help me move when I go to the hospice and they’re coming over this afternoon and they can help clean up so you don’t have to stay and do any work, you can go.” He said it all in one breath.

I took off my jacket and put it over the back of the chair the way I always did.(C) He'd told me before how his pagan friends were going to help him with the move, and that made sense, but I didn't believe he wanted me to go.

"Rick," I said, "I'm not only here to do chores*. I like seeing you. I like being around you."

リックはうつむいて、まるで掛けぶとんを記憶しようとするかのようにじっと見た。「もう話が変わったんだ」と彼は言った。それからしばらく黙っていたが、さっきと同じことを、今度は本当に陽気な声で言った。「部屋が空いて本当によかったよ。入れてすごくラッキーだよ」

私が何も言わずにいると、リックはさらに言った。「いいところだよ。働いてる人たちもすごくいい人たちだし。君、行ったことある？」

「うん」と私は言った。でもほかの人のことは話題にしない。そうしてはいけない決まりになっているし、そうでなくても話したいとは思わない。いま自分がいるところがすべてであるべきだ。いろんなことを一緒くたにしてはいけない。

「前は僕もよく行ったよ」とリックは言った。「バリーがいなくなったあとも」

彼らの実に多くが、友人みんなが、次々に死んでいく。九十五歳の一団が、自分たちの世代が絶えるのを見守っているみたいに。

私は手をのばして彼の手を握ろうとしたが、リックはそうさせなかった。(D)掛けぶとんの端のほつれ糸を彼はほぐしはじめた。しばらくするとそれもやめて、胸の前で両手を組んで、窓の外を見た。両手の血管が見えた。(E)

「働いてる人たちもすごくいい人たちだよ」とリックはもう一度言った。「住人（レジデント）」——と入居した人は呼ばれる——はみんな個室をもらえてね、希望すれば自分の持ち物を持ち込んでいいし、コモンルームに行く元気があれば見舞いに来てくれた友だちと一緒にテレビを見たっていいんだ、と彼は言った。持っていきたい品をリックは列挙しはじめた。写真、カセット、ラジカセ、そして香、水晶、石など聖者の小物。彼はまた掛けぶとんのほつれ糸をほぐし、それからまた、持っていきたい品を反復した。テープ、ラジカセ、等々。それから喋るのをやめて、窓の外を見た。あごの筋肉がぴくぴく揺れていた。

「持ち物を持っていけてよかったね、リック」と私は言った。

「ありがとう」とリックは言った。

長いあいだ、二人とも何もせずじっとしていた。しばらく経って、リックが、「君、僕がいなくなったら寂しい（ウィル・ユー・ミス・ミー）？」と言った。

私は言えなかった。(F)リックを抱え上げようと、私は身を乗り出した。彼の背中の下に両腕を入れて、その体を持ち上げ、抱き寄せた。彼の体はすごく痩せていて、軽く、肌は乾いて冷たかった。

彼が移って二、三日してから、私はホスピスに電話した。受付の女性が部屋に回してくれて、グループ仲間の女性が電話に出た。リックの具合はどうですか、と訊くと、「快適」にしていると相手は答えた。いまは寝てますけどまたあとでかけてみたらいかがですか、と言われた。

もう二度ばかり電話してみたが、やっぱり寝ていた。私は電話するのをやめた。

リックがホスピスに入ると、マーガレットは私に、次の人をはじめる前に少し休んだらどう、と言ってきた。エドが入ったときもやはり同じことを言われ、そのときは従ったのだが、今回は嫌だった。リックに会いにホスピスへ行ったりはしたくなかった。そう答えると、じゃあしばらくサブをやったら、とマーガレットは言った。サブだと、誰かヘルパーの都合が悪くなったとき代わりに入るだけだから、特定の人物と多くの時間を過ごすことはない。というわけで私は、レギュラーとしてはコニーだけで、あとはサブになった。

私はいろんな人のところに行った。どの人にも一度か、せいぜい二、三度しか会わなかった。一人ひとり、みんな違う人間だったが、みんな重病だった。

あるときマーガレットが、いままでついていたヘルパーが就職してポートランドに移ってしまった男がいるので、その人のところへ行ってくれないかと言ってきた。ロジャーというヘルパーだという。私はロジャーに会ったことはなかった。月例のミーティングに、私はもう顔を出さなくなっていた。(G)ＵＣＳでは毎月ミーティングを開いて、いろいろ仕事のことや、自分の「気持ち」を話しあう。でもマーガレットは私がミーティングに出ないのを黙認してくれていた。とにかく、この男のレギュラーになる

人物をマーガレットは探している最中で、見つかるまではいろんなサブが面倒を見ていた。一日じゅう誰かが付き添っている必要があった。一日の大半は眠っていて、トイレは若干危ない。基本的にはごく標準の仕事だ――掃除、軽い食事作り、念のためとにかくそばにいること。私は五時までそこにいて、あとは別のヘルパーが引き継ぐ。

マーガレットが住所を私に伝えかけた。「モンロー・コートっていうアパートで、通りは――」

「知ってる」と私は彼女をさえぎって言った。そこなら誰かの世話をしに行ったことがある。

マーガレットが一瞬黙った。「あなた、大丈夫？」(H)

「ええ」と私は言った。

「誰かほかの人を探してもいいのよ」とマーガレットは言った。「ドナルドに探してもらってもいいし」

最近マーガレットは、ずいぶんたくさんの仕事をドナルドに回している気がする。何だか変だ。とにかく私は、自分の仕事を他人に押しつける気はなかった。

「大丈夫」と私は言った。「で、何ていう人？」

マーガレットから相手の名前を聞いた。マイク。私は出かけていった。

モンロー・コートは大きなアパートだから、私が前に世話した男をマイクは知らないだろう。それに、何しろ場所がキャピトル・ヒルだし、「前ここに住んでて、エイズだった人、知ってる？」と訊いたところで、それに当てはまる人間はいくらでもいるにちがいない。

マイクの部屋は七階だった。エレベーターで上がって、廊下を歩いて彼の部屋まで行った。外の通りに面した部屋だから、すごく眺めがいいはずだ。ノックすると、私と交代するヘルパーが廊下に出てきて、マイクはいま寝ていると言い、何を食べたかを私に伝えて、帰っていった。私はなかに入った。カーテンが閉めてあって外は見えなかった。暖房が入っていて、室内は蒸し暑かった。植物は黄色くなりかけていた。バスルーム付きのワンルームだ。

私が入っていくと、マイクは目を開けた。私はベッドの前まで行った。ソファ兼用だが、もういまでは、たたんでソファにすることもないだろう。私は自己紹介をし

た。マイクは何かもごもご呟いて、また目を閉じ、ふたたび眠りに落ちた。部屋はおおむね綺麗だったが、私は一通り掃除した。奥まった、キッチンの部分も掃除した。何度もベッドの方をちらちら見て、マイクが起きていないか、何か欲しがっていないか確かめた。音は立てないように気をつけ、ラジオも鳴らさず掃除機もかけなかった。聞こえる音といえば、私がバケツに水を汲む音、食器棚やキャビネットや床を洗う音、手袋をはめたり外したりする音、手を洗う音だけ。

Mike woke up. He didn't need changing*. I made him a protein smoothie* and sat with him and helped him drink it. He said thanks for the smoothie and that it tasted great. "As good as Roger's," he said, "only different." He asked me if I could come again. I said I didn't know, that it depended on scheduling, which was a lie. (I) Margaret was trying to find a regular helper for Mike, and I could be it, but I didn't want to be anybody else's regular person except for staying with Connie.

Mike said he hoped he could get a permanent person. He said all the subs* were very nice but it was hard having so many different people in and out all the time. He said he hoped he'd get someone like Roger. Mike said he was glad that Roger got a job in Portland but he was sorry he had to move. He said Roger was a great guy. He said he'd been with him for two and a half years, two years and five months to be exact. Mike said, "I miss Roger."

"Uh-huh," I said, the way you do when you're only half listening. Then suddenly I said, "He misses you too, Mike."

"Do you know Roger?" Mike asked, surprised and happy.

"Yes," I lied. "We have these monthly meetings ..." I took Mike's hands. "You're very important to Roger. He's really glad he got to know you and spend time with you. He really thinks of you a lot."

His face lit up. "Really?"

"Yeah," I said. "He was sorry he didn't get to tell you in words himself before he had to go to Portland, but you're a really important friend to him."

Mike was smiling. “He is to me too,” he said. I think he wanted to say more but this was more than he was used to talking. In a few minutes he was asleep again.

交代のヘルパーが五時に来た。ずっと前、私がまだミーティングに出ていたころ見た覚えのある女性だったが、どういう人かは知らなかった。私は彼女をなかに案内し、マイクを起こして二人を引き合わせた。マイクにとって、彼女もはじめて会うヘルパーだった。

自宅に戻ると、私はホスピスに電話した。(J)受付がリックの部屋に電話を回してくれた。女性が出た。リックの調子はどうか、面会客は来ているか、と訊くと、みんな彼が「快適」に過ごせるよう努めている、と答えが返ってきた。私はその言葉を聞かされることにうんざりしてきていた。

グループの仲間が誰かいつも一緒にいてリックが一人でいることは絶対ないが、面会客はそう多くない、とのことだった。いまは眠っているけれど起きたらあなたに見舞いに来てほしいかどうか訊いてみて、あとでこちらから電話する、とその女性は言った。もう薬を飲むのはやめていて、モルヒネを打っているだけだという。

翌日その女性から電話があって、見舞いに来てもいい、と言われた。意識はあったりなかったりだし、いつどういう具合かどのみち予想はつかないから、そちらの都合のいいときに来て受付から電話して様子を訊いてくれればいい、と言われた。

その日の夕方、別の人のところでサブを務めたあとに私は出かけていった。受付で電話してもらって、行ってもいいか、付き添っている人に訊いてもらった。私は待った。来てもいい、という返事だった。

ホスピスに来たのは久しぶりだった。エドがいなくなったあとは、もう来なくなっていたのだ。でもほとんど変わっていなかった。コモンルームはまったく同じだった。違うのはそれぞれの個室のドアに掛かった名前だけだ。

リックの部屋のドアを、私はそっとノックした。女性が開けてくれた。リックが友人たちのために作ったネックレスを着けている。私も前の年にひとつ作ってもらっていた。女性は自己紹介して、私の手をとり、なかに入れてくれた。一瞬、何だかまる

で彼女に会いにきたみたいな感じだったが、やがて彼女が、ちょっと出かけてくるからと言って、そこに座ればいいというふうにベッドの横の椅子を示した。彼女はあっという間にいなくなり、私はリックと二人きりになった。

私は枕元の椅子に座った。ベッドはアパートにあったものより高さがあった。リックは掛けぶとんと、月星模様のキルトをかぶって、上半身を起こしていた。私は彼を見て、それから目をそむけた。リックは見るからに悪そうだった。私は部屋を見回して、彼の持ち物を眺めた。カーテンは閉めてあったが、蝋燭が点けてあり、明るい、暗い、のちょうど中間だった。香を焚いていて、戸外と教会の匂いがした。ラジカセでチャイムの音楽がかかっていた。ドレッサーの上に、貝殻と石のコレクション、聖フランチェスコの聖牌、そして杖があった。以前、これらの品の埃を払ったり、きちんと並べ直したりしながら、リックに由来を訊いたら一つひとつ教えてくれたことを思い出した。ベッドサイドテーブルには水晶がいくつかあった。薬はなかった。リックは自分を死なせようとしているのだ。

私はリックを見た。薄暗くてよかった、と思った。(K) 彼の目は開いていた――右目より、左目の方が開いている。両目とも縁が濡れていて、窪んで顔のなかに沈み込んでいるように見えた。その両目が、うつろに前を見ている。目はじっと動かない。まるで、ただの目であって彼の目ではないかのように。頬はこけ、口はわずかに開いていて、空気が出入りするのが聞こえた。体はものすごく痩せていた。皮膚以外は何もないみたいに見えた。顔に毛が生えていた。彼がひげをのばした姿はいままで見たことがなかったが、ここではもう、誰も剃刀をあてたりはしないのだ。(L)

「ハイ、リック」と私は言った。

彼は何も言わず、首を動かしもしなかった。まばたきもしない。と、まばたきをした。私が来たのがわかったのか、それとも単にまばたきしただけなのか。どっちだろう。私は彼の片手を握った。手に力はなく、熱かった。手は動かなかった。私はベッドの向こう側に腕をのばして、もう一方の手で彼のもう一方の手も握り、四つの手を合わせた。(M) 祈っている人の手みたいに、みんな一緒に合わせた。

I looked and tried to remember him. I closed my eyes. I thought some words inside myself I would have said to him.

But then I felt bad to have given up on* him so I started talking out loud. I whispered at first. It felt odd to talk out loud to myself, and I didn't want anyone else to hear me. But then I didn't want Rick not to hear me if he could so I spoke louder, like a normal conversation.

I told him how nice his room looked, so like him with all his stuff. I said I was glad he was being so well looked after by the hospice people and his pagan circle friends. I told him what I'd been up to like we used to talk when I went to his place. I told him about this cat I adopted.

Rick loved cats. He'd wanted to adopt one that was hanging around* his place, but everyone said he could get sicker from the cat, but he said he didn't care. But then he decided not to keep the cat and called everyone he knew till he found someone who could take it. He'd decided he didn't want to keep the cat, then have it miss him and not have a dad after he died.(N)

I'd stopped talking. I was still holding his hands. I squeezed them and opened my eyes and looked at him. His eyes were still open and looking ahead and his mouth was still open too. He looked exactly the same.

I told Rick I was really glad my new apartment manager said I could have a cat and that my cat had terrible manners because he was so spoiled that he ate off my plate when I got a cinnamon roll from the Hostess*, that they were his favorite. Then my mouth stopped moving.

My mouth was dry. I swallowed. "Rick," I said. I stroked his hands. "Rick." I couldn't say anything else. It was quiet for a while.

Then I saw his lips twitch*.

"Rick?" I said again.

His mouth opened. It closed, then opened again, and a sound came out.

"What?" I said.

何秒かして、また同じ音がした。「ヌグムシュー」

私はまだわからなかった。「え？」と私はもう一度言った。

彼の口がまたひきつったが、何の音もしなかった。

私は身を乗り出して、もっと近寄った。彼と私の汗の匂いがした。彼の顔の前に自分の顔を据えて、おたがいの目がまっすぐ向きあうようにした。私は彼の目のなかをのぞき込んだ。私にはわかった。リックはまだそこにいる。(O)

「もう一度言って、リック」と私は言った。「聞いてるから」

彼の唇がふたたびひきつり、私は懸命に耳を澄ませた。彼はそれをゆっくりと、まるで私がその言語の初心者であるかのように言った。

「ヌグ - ム - シュー」

その最後の一回で、私は理解した。理解すると、私も同じ言葉を返した。私は言った。

「私もあなたがいなくて寂しいよ(アイ・ミス・ユー・トゥー)」

レベッカ・ブラウン『体の贈り物』(柴田元幸 訳, マガジンハウス, 2001)所収；Rebecca Brown, *The gifts of the body*, Harpercollins, 1994. より

訳注

buddy 相棒(親しみをこめた呼びかけ)
down comforter 羽毛の掛けぶとん
aide ヘルパー
pagan circle 非正統派の宗教グループ
chore 生活上の雑用・家事
changing 着がえ
smoothie スムージー
sub 補助・介助する人
give up on 見切りをつける
hang around うろつく
the Hostess ホステス・ウィズ・ザ・モーステストという名の店
twitch ぴくぴく動く

問 1　下線部(A)で、エドはどうして「出ていっ」たのか、書きなさい。

問 2　下線部(B)は、どういうことを表しているのか、書きなさい。

問 3　下線部(C)について、「私」はどうしてこのような行動をとったのか、書きなさい。

問 4　下線部(D)について、どうして「そうさせなかった」のか、書きなさい。

問 5　下線部(E)は、どういうことを表しているのか、書きなさい。

問 6　下線部(F)について、どうして「言えなかった」のか、書きなさい。

問 7　下線部(G)について、どうして「顔を出さなくなっていた」のか、書きなさい。

問 8　下線部(H)で、マーガレットはどうしてこう語ったのか、書きなさい。

問 9　下線部(I)について、どうしてこのような態度をとったのか、書きなさい。

問10　下線部(J)について、どうして「電話した」のか、書きなさい。

問11　下線部(K)について、どうしてそう思ったのか、書きなさい。

問12　下線部(L)について、どういうことなのか、書きなさい。

問13　下線部(M)について、こうしたのはどうしてなのか、書きなさい。

問14　下線部(N)について、このエピソードは彼のどのような性格・心情をものがたっているのか、書きなさい。

問15　下線部(O)について、どういうことなのか、書きなさい。

問16　この物語を語り終えて、語り手はどのようなことを感じ考えているだろうか。
あなたが想像したことを書きなさい。

（以下、余白）